kumamoto artpolis news 28

くまもとアートポリスニュース第28号　2003年3月発行

kap

特集●SPECIAL EDITION

対話とまちづくり

◆砥用町文化交流センター「ひびき」　◆苓北町民ホール　◆西合志保健福祉センター「ふれあい館」
◆小国町立北里小学校屋内運動場　◆南関町物産館・インフォメーションセンター（仮称）及び関川河川環境整備
◆一の宮ふれあい公園（仮称）

●進行プロジェクト　◆南小国町営矢津田団地・杉田団地

●新規プロジェクト　◆砥用町林業総合センター　◆一の宮町農林水産物処理加工施設　◆清和郷土料理館

●トピックス

●第8回くまもとアートポリス推進賞

第8回くまもとアートポリス推進賞が決定!!

熊本県の都市文化及び建築文化等の振興を図り、豊かな地域づくりに貢献した建築物に与えられる推進賞。第8回くまもとアートポリス推進賞の最終選考会が1月11日に開催され、応募総数41件の中から推進賞3件、推進賞選賞2件が選ばれた。

推進賞を受賞した「久野邸」は1階の天井高を抑え、2階の天井を高くするなど、近代建築が生んだ空間処理の方法が巧みに組み合わされ、優れた感性と思考が読み取れる建築物であることが受賞につながった。また、保育園児、幼稚園児の自然観察や野外保育のための施設「雑草の森」は深く張り出した軒が室内と庭の中間領域を作り出し、同時に幼児から見たスケールが配慮された空間構成は親しみやすさを感じさせると評価。もうひとつは商店街の真ん中にある町屋をリニューアルした「八代の町屋」。町屋の古さをそのまま活かし、その雑踏を感じさせない別世界のような空間づくりが評価された。

そのほか、茶と白、自然の緑というカラーコーディネートが地域に溶け込むデザインの「いのうえデンタルクリニック」、ワークショップを重ねることで、地元住民の希望が随所に反映された「大野温泉センター」の2件が「推進賞選賞」を受賞した。

第8回くまもとアートポリス推進賞

久野邸

●所在地／熊本市渡鹿
●用　途／専用住宅
●事業主／個人
●設計者／久野啓太郎+一級建築士事務所ヒマラヤ
●施工者／株式会社岩永組

立田山野外保育センター「雑草の森」

●所在地／熊本市龍田陳内
●用　途／児童厚生施設
●事業主／社団法人熊本市保育園連盟
●設計者／田崎順二ランドスケーププロジェクト株式会社
●施工者／株式会社冨坂建設

八代の町屋

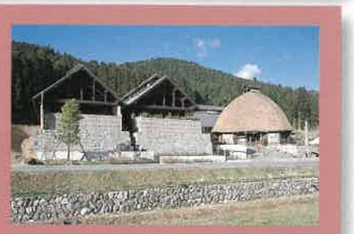
●所在地／八代市本町
●用　途／店舗併用住宅
●事業主／個人
●設計者／ぱん設計小材事務所
●施工者／有限会社楠元建設

第8回くまもとアートポリス推進賞選賞

いのうえデンタルクリニック

●所在地／熊本市新南部
●用　途／診療所
●事業主／個人
●設計者／西山英夫建築環境研究所
●施工者／株式会社冨坂建設

大野温泉センター



●所在地／芦北郡芦北町大字天月
●用　途／公衆浴場、レストラン
●事業主／芦北町
●設計者／株式会社日建設計
●施工者／サンエー・松下建設工事共同企業体
太陽電気株式会社芦北営業所

●発行ーくまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1 TEL 096-383-1111（内線6215／6230）FAX096-384-9820　http://www.artpolis.net/
●撮影ー宮井正樹、くまもとアートポリス事務局、中央印刷紙工（株）

特集

対話とまちづくり

[私たちのまちづくり座談会]

●出席者　高橋 就一（コミッショナー）　伊東 豊雄（バイスコミッショナー）　鈴木 明　曽我部 昌史

高橋・伊東コミッショナー体制によって始まった「私たちのまちづくり事業」。ワークショップによって住民と「対話」を行ない、住民と建築家と行政が一体となって建物やまちをつくっていくものである。県内各地でこの方法によるまちづくりが進められている。この事業について高橋コミッショナー、伊東バイスコミッショナーに話を聞いた。

PROFILE

くまもとアートポリス
コミッショナー

●建築家
高橋 就一
TAKAHASHI TEIICHI

1924年　中国・青島市生まれ／1949年　東京大学第二工学部建築学科卒業／1949～56年　逓信省営繕部設計課（郵政省建築部設計課）／1956～66年　武蔵工業大学助教授／1960年　第一工房設立・代表取締役／1967～95年　大阪芸術大学教授／1995年　大阪芸術大学名誉教授

作品

佐賀県立博物館／大阪芸術大学／実践女子大学校舎・体育館／筑波国際科学技術博覧会迎賓館／東京都立大学キャンパス／全労済情報センター／パークドーム熊本 ほか

受賞

日本建築学会賞（作品）（1971年・1982年）／芸術選奨文部大臣賞（1979年）／日本芸術院賞（1982年）ほか

くまもとアートポリス
バイスコミッショナー

●建築家
伊東 豊雄
ITO TOYO

1941年 京城生まれ／1965年 東京大学工学部建築学科卒業／1965～69年　菊竹清訓建築設計事務所／1971年　URBOT設立／1979年　伊東豊雄建築設計事務所に名称変更

作品

笠間の家／シルバーハット／八代市立博物館／八代市立保寿寮／八代広域行政事務組合消防本部庁舎／大館樹海ドームパーク／せんだいメディアテーク／ブルージュ2002 ほか

受賞

昭和60年度日本建築学会作品賞（1986年）／第3回村野藤吾賞（1990年）／第33回毎日芸術賞（1992年）／1997年度芸術選奨文部大臣賞（1997年）／1999年度建築業協会賞（BCS賞）（1999年）／2002年度建築業協会賞（BCS賞）（2002年）／第8回ヴェネツィア・ビエンナーレ「金獅子賞」（2002年）ほか

建築をひらくこと

●鈴木　くまもとアートポリスは平成15年で15年を迎えます。「私たちのまちづくり事業」は高橋・伊東コミッショナー体制になって導入された新しい建築設計の方法とまちづくりです。現在、この方式で参加したプロジェクトは8件を数え、それぞれの町で建物が完成し実際に「わたまち」[注1]に参加した町の人々に使われることでまちづくりの核となるような動きが出始めています。

●高橋　「わたまち」という方法の成果は阿部[※P8参照]さんと小野田[※P8参照]さんが担当してくれた苓北町のホールが典型的だね。建築家が町に入って行って、町の人や役場の人といろんな話し合いをしたりしていくうちに盛り上がっていって、小さくともひとつの形にしていく。

●曽我部　竣工後もかなり活発に利用されているようですよ。僕らがいったときは老人大学の新年会をやっていました。平日の昼前ということもあって、若い人たちが集まってワイワイという感じではなかったんですけれども。五嶋みどりさんなんかのコンサートの時は大変だったようです。

●伊東　このホールはホワイエ[注2]が特徴的ですね。ホールの扉を開くとホワイエに繋がるし、外の景色も入ってくる。町の人がこの建築のどこでも自由に使えるという発想だね。でもホールを「開いていく」というのはなかなか難しい。使う方もアイデアがあればいいんだけれども、それがないとうまく行かないことがある。私もホールをいくつかやってきたが、それがないと難しい。ホール自体の規模は小さいし、ホワイエもコンパクトだから使う人たちがその特徴を活かしてうまく使っていかないとね。

●高橋　砥用のホールは、前面に大きな景観に開いたホワイエがありますね。我々がいったときにはラジオ番組の収録をしていたんだけれどもたくさんの町の人が窓際に座って、その景色を眺めているというか、楽しんでいましたね。その横にあるギャラリーとロビーとが合体したいろいろに使える空間に繋がっている。その一方で図書室が独立して2階にありましたね。これはうまく使われているのかな。

●伊東　熊本県の各市町村で「わたまち」をやってきたんだけれども建築や建築をつくるプロセスが完全に「開かれた」とはまだ言えてないかも知れない。それには建築を共有するというコンセンサスが町の人の中につくられなくてはならない。建築が「ある」だけではなくて、建築が町の人たちの生活の中にどう取り入れられていくかということだね。

●曽我部　建築や建築をつくるプロセスを開くという意味では、「わたまち」での議論がもっと建築界全体や社会全体に広がってほしいという気持ちもあります。「わたまち」は建築の計画を町の人に開くのにはそれなりに貢献しているようですが、そこで考えられたことは町の中に収まっていて、そこでの議論が建築界全体に広がるような開き方にはなりにくいようです。そういえば「南関町」では奥山信一[※P14参照]さんが町の調査を続けてきて、さらにいろんな話を町の人と交してきています。これからの町をどうしていくのかについては、考え方の幅がとにかく大きいので、議論を重ねることが必要なわけですね。奥山さんは「わたまち」のための時間がとにかく足りない、まだまだ話し足りないんだけどなあって言っていました。形になるまでにはもう少し時間が必要なようですね。

小さなコミュニティと施設

●伊東　くまもとアートポリスが始まった当初は、熊本市や八代市などの都市圏にもいろいろなプロジェクトがあったが、このところはほとんどない。熊本市のような大都市部における施設のありかたと、人口数千人の町村部のコミュニティの中にある施設はずいぶん違うんです。例えば小さなコミュニティではホールのような施設のコンセンサスを取るのは、熊本市のようなところと異なってなかなか大変なことです。「わたまち」でやるような小さなプロジェクトの場合、建築家は日頃考えている建築観と現場の間にかなりなギャップを感じるように思われます。建築を計画したり、建てたりする過程だけではなく、出来上がったあとも使いながらこの作業を埋めて行かなくてはならないし、小さな子どもやお年寄りの人たちにも自分のコンセプトをわかりやすく納得させなくてはならない。

●曽我部　コミュニティの規模を逆利用というか、ふつうのスケールメリットと反対の考えですね。

●鈴木　今回、訪れた末廣[※P12参照]さんのやっている小国町の小学校体育館建替えも、規模からいってもプログラムからいっても、このようなコンセンサスの共有にも無理がないような気がします。というのは小学校の体育館ですから、もともと小学校で必要となる施設だし、コミュニティの人々が使うことは、最初から容易に想定できるからです。そこに張り付いている集会所はけっして規模は大きくないんですが、逆にコミュニティが共有できる規模と用途が、その小ささに明示されているような気がする。ようするに施設のプログラムに無理がないということでしょうか。小国町はけっして規模は大きくないのだけれども、少しいい過ぎかも知れないけれども、いろんな建築が町の活気をつくっているような感じがする。他の小さなコミュニティの町の商店街でみたような、日中からシャッターを下ろしたような商店がないのも、変な言い方ですが驚きでした。

その点、4年前につくられたプロジェクトですが不知火の図書館・美術館はたいへん立派な使い方をしていました。どちらも出来上がったときと同じような、またはそのときよりも美しい使い方をしている。ギャラリーでは小学生の作品展を行っていたのだけれどもプロの作家と同じように整然と、堂々と展示してあった。感動的です。マナブ間部[※注3]という画家を出していることもあって、絵画に対する意識が高い。その雰囲気のクオリティが高いんですね。図書館は日常的に町の人が使うところだし、美術館も日常的な施設でありながら雰囲気を大事にしている。これは建築のプログラムや使い方に対するコンセンサスが出来上がっていると言えるのではないかな。

不知火文化プラザ

注1　わたまち
「私たちのまちづくり事業」の略称のこと。

注2　ホワイエ
劇場において屋外と観客席との間に設けられた空間（ロビー）のこと。社交の場として利用される。

注3　マナブ間部
1924（大正13）年、宇土郡不知火村に生まれ、10歳のとき家族とブラジルに移住。第1回パリ青年ビエンナーレ展最高賞など数々の国際的な賞を受賞。ブラジルのピカソと呼ばれ、国際的な抽象画家として活躍、1997年没。

PROFILE

●建築家
鈴木 明 SUZUKI AKIRA

1953年 東京都生まれ／1978年 武蔵野美術大学大学院建築学科修了、建築雑誌社勤務／1986年 （株）建築・都市ワークショップを設立、ウェブマガジン『telescoweb』エディタ／2000年 神戸芸術工科大学教授（インタラクション・デザイン論、建築論）

主な著書
2000年『アンドロイドカラスは電脳東京の空を飛んでいるか?』AAスクール刊
2003年『インタラクション・デザイン・ノート』神戸芸術工科大学大学院刊

作品
「新聞紙の家」「積み木の家」「水道管の家」「ベニアの家」ほか

●建築家
曽我部 昌史 SOGABE MASASHI

1962年 福岡県生まれ／1989年 東京工業大学大学院修士課程修了／1988年～ 伊東豊雄建築設計事務所／1994年 ソガベアトリエ設立／1995年 みかんぐみ共同主宰

作品
NHK長野放送会館／Shibuya-AX／KH-2／植柳新町地域学習センター／八代市立高田あけぼの保育園 ほか

大都市につなげるプログラム

●伊東　くまもとアートポリスでも、もっと大都市につながるプログラムを見い出す必要があるのではないだろうか?海外では都市圏で行政がたくさん土地をもっているから都市計画を立てやすい。行政が都市の将来像に対してしっかりしたマスタープランを持っているんですね。アートポリスでも都市計画的なプログラムをもっともっと研究するというようなことがあってもよい。

●曽我部　たとえば公営住宅をはじめとして間違いなくコミュニティに必要性があって、継続的な需要があるプログラムというものがあるわけですからね。そういうプロジェクトを発端として都市計画的なところまで視野を広げて議論をするようにすれば、アートポリスで都市計画的なプログラムを研究するのも可能ですね。

●鈴木　老人福祉などのプログラムに関するものは公共プロジェクトが減少している中でも、どんどん作られています。西合志町で今村雅樹(※P10参照)さんがやったものはかなりの規模の施設ですね。デイケアセンター的な施設と保健所的な施設と児童館などが合体した機能です。ホールと比べて、運営ひとつとってみてもコンセンサスが取りやすいのではないでしょうか。

●伊東　地方の都市を老人福祉の視点から考えることで、住宅団地のありかたもかなり変わっていくように思う。

●曽我部　1年くらい前、宮城県白石市(※注4)の住宅団地を計画するためのコンペがありました。高齢者や障害者の方たちの戸建ての住宅が並ぶ街づくりの計画だったんですが、これまでの住宅団地とはかなり違った形式のものが実現するようですね。そういう視点で考えると、これから新たに考えなければならない分野が他にもたくさんありそうです。

具体的なテーマを立ててやる

●伊東　「行政がお金を使っても、けっして無駄にならない投資になるのだ」ということがもっと見えなくてはいけない。プログラムを研究することをアートポリスのテーマにしてもよいんじゃないかな。たとえば集合住宅と老人福祉の施設、たとえばデイケアセンターが住宅と一体化して建築のプログラムすることなども考えられます。

●高橋　教育と過疎なんかもテーマになるかも知れないね。コミュニティにおける保育園のあり方や自由な図書館なんていうのもよいテーマになり得るよ。

●鈴木　コミュニティは公共建築をつくる時に、なんらかの国の補助を受けることが多いわけですね。単に受動的に資金の援助を受けるだけでなく、助成金をうまく組み合わせたりすることで面白い施設をどんどん考えて、コミュニティの活性化につなげていく工夫も必要です。くまもとアートポリスは県として、こういう財源のことなんかもいろんなノウハウをアドバイスするようになってもよいのではないでしょうか?そもそもそのような企画段階から建築家がコミュニティに入る、というのが「わたまち」の精神だったんですからね。片山(※P17参照)さんもおっしゃってましたが、そんな段階から建築家と行政がおつきあいを始めるとだいぶスムーズにいくのではないかな。

●曽我部　2年くらいの期間を決めて、アートポリスで決めたあるテーマに関して考えるということにすれば、かなり深い検討が可能になりますよね。例えば、「老人福祉とまちづくり」のような今日の中心的な問題について、全国の元気な建築家が熊本に集まって集中的に考える。実作を通して考えたり、ラウンドテーブル(※注5)のシリーズを企画したり。最終的には、他の地域の建築関係者が、「このテーマについては、まずは熊本に行ってみないと」と言われるくらいになるといいですね。

●高橋　アートポリスになる仕事がないかだけじゃなくて、こちらからプログラムを売っていくようなことをもっともっと仕掛けなきゃならないね。

●伊東　民間の戸建てをやってもいいんじゃないかね。戸建て住宅は若い建築家の新しいコンセプトを実現しうる最短コースですからね。アートポリスとしては難しいとすれば、NPOでやってもよい。アートポリスは、直接住宅をできなくとも、いろんなかたちでアドバイスできればよい。

●曽我部　熊本県内にある建築系大学の学生が集まって、「ベアーズ」っていうグループをつくって活動しています。アートポリスをうまいこと利用して、熊本の建築を楽しくしていこうというようなことを考えているようですね。民間の住宅の話には彼らが飛びついてきそうですよ。彼らのようなグループと連携して活動していくことも考えられますね。

建築や環境を考えるインスティテュート

●伊東　先日、熊本市立現代美術館の南嶌(※注6)さんと話した時、建築のインスティテュート(※注7)、建築専門の大学というか、ギャラリーというか。そんなものが熊本にあるべきではないかという話になりました。熊本県内に、くまもとアートポリスは建築作品がこれだけの数が出来上がっているのに、若い人たちが集まったり議論したり発表したりする場所がいまだにないというのは、おかしい。

●曽我部　建築家だけではなくさまざまなジャンルから10名くらいの人があつまってつくるようなものでしょうか?

●高橋　大学があるんだから、熊本の建築関係者がひっぱるべきじゃないかとも思うんだけれども…。

●鈴木　核はともかく、活動の実行部隊は学生まで広げて良いのではないでしょうか。今回、アートポリスのプロジェクトを見学して回るのにさっき話題になった「ベアーズ」という県内の任意の学生からなる組織の人たちが、ボランティアで運転をしてくれました。八束(※P6参照)さんの「わたまち」では熊本大学の大学院が、実際と同じプログラムを課題としてチャレンジしました。そんな機会がつくれるということなど、いろんな意味で、建築が浸透して開かれて行くのではないでしょうか?

●曽我部　彼らは岡部(※P16参照)さんなんかが、アートポリスの建築家が熊本に来るとシンポジウムを開催したり日常的に活動しています。このような基盤ができているのだから彼等のような学生がもっと活動できる場があればもっと盛り上がるはずですね。
学校やインスティテュートをつくるというはっきりした指針があれば、建築家以外の方々も手伝ってくれると言って下さってます。アートポリスがある、ということを熊本の資産として生かすためにも、そういう場があるといいですね。

●高橋　県とか市とかを越えてやらんとね。とりあえず九州一円でやるのはどうだろうか?博多に動きがあったらそれと共同するのもいい。観光客は毎年凄い数があるんだから。熊本は九州の建築的な核になれるはずだ。熊本で必ずしも完結しなくてもよい。九州一円の建築センターになれるのだ。くまもとアートポリスと同じような事業が次々にポシャっているときにしっかりしなくてはいけないね。

注4　宮城県白石市の住宅団地
国土交通省の補助を受けて進めている公営住宅建設事業。ホームヘルパーが常駐し、高齢者、障害者も安心して住めるように考えられている。2003年3月に完成予定。

注5　ラウンドテーブル
「ラウンドテーブル」とは「円卓を囲んでのミーティング」の意味。実際に円卓でなくても「お互いの顔が見える」というコンセプトでビジネス会話に用いられる。

注6　南嶌宏
1957年　長野県生まれ。いわき市立美術館、広島市現代美術館、カルティエ現代美術財団（パリ）、女子美大講師を経て2000年4月から現職。国際美術評論家連盟会員。

注7　インスティテュート
研究所、会館、学会、協会などの意。

完成

砥用町文化交流センター「ひびき」

平成14年6月に開館した砥用町文化交流センター「ひびき」。11回行われたワークショップでは、設計担当の八束はじめさんと地域住民が活発に意見を交換。「地元の自然と調和した建物に」「本格的なホールや図書館がほしい」といった、住民の要望を最大限に生かした施設が完成した。「ひびき」という名には、“人と自然が響き合う”という町民の願いが込められている。

文化拠点の設立という長年の夢が実現 もっと多くの人々に愛される建物に

町長

砥用町長 北川浩一郎さん
KITAGAWA KOICHIRO

“文化は教育”が、北川町長の信条。以前から、「学校教育と同じように文化の振興にも力を入れなければ」という強い思いがあり、拠点となる文化施設を造ることが長年の夢だったという。町長になる以前は、町の社会教育課に勤務。生涯教育の振興に尽力してきた。当初はスポーツの振興に力を入れていたが、次第に文化愛好者を受け入れる施設も必要だと感じるように。町長自身も写真が趣味だという。「“私たちのまちづくり事業”は何より直接住民の声を聞けるのがいいですね。1階の展示ギャラリーは、ここから文化の発信をしたい、という町民の声から生まれました。誰でも気軽に作品を発表できるし、お客さんも自由に見て帰ることができる。こういった空間ができたのもワークショップのお陰であり成果。非常に意味があったと思います」。実際、同館の展示ギャラリーは、絵画や写真など作品展示の申し込みが途切れることはない。「今はまだ来館者が限定されていて、来る人はいつも同じ。もっと多くの人に利用してほしいですね」。

文化施設の誕生を切望し、自ら率先して尽力してきた町長だけに、この建物に対する思いは人一倍強い。「住民から『この施設ができて良かった』と喜びや感謝の声を聞くと、涙が出るほど嬉しい」。

元気に暮らすために 不可欠な施設

施設関係者

館長 熊川 巳紀登さん
KUMAGAWA MIKITO

「砥用は文化に対する住民の意識が高い方だと思います。以前から自分たちを表現する場が欲しいという声が多かったし、町の文化活動を発信する場所ができて嬉しいです」。横に長い2階建ての建物は、段差を生かし、1階にも2階にも外から入ることができる。「どちらからも気軽に入られると好評です。ホールも非常に音響が良く、ステージとお客さんとの間に一体感が生まれている気がします」。

町の活性化という点でも、この施設に対する期待は大きい。「一時的な流動人口でも増加すれば、活性化につながると思います。住民の皆さんには、見に来るだけでなく、自分たちを披露する場としてどんどん積極的に活用してもらいたい。高齢化が進む中で、いつまでも元気に楽しく暮らすためには不可欠な施設ではないでしょうか」。

これからの課題は、近隣の町村を中心とした広報やPR活動。「周辺にこのような文化施設が少ないので、もっと広域的に使っていきたい。そうすれば近隣の町村との交流もより深まると思います。自分たちを表現し、交流する——そんな欲張りな施設であって欲しいですね」。

住民による町おこしが 本格化 ワークショップの 成果の表れ

住民

砥用活性化研究会会長 鳴瀬 信一さん
NARUSE SHINICHI

10数年前、町おこしの一環として作られた「砥用太鼓」のリーダーを務める鳴瀬さん。「これまで特定の練習場所がなかったので、この施設に防音のリハーサル室と太鼓専用の収納庫を作ってもらって喜んでいます」。ワークショップでは、建物に地元の木を多く取り入れてほしいと要望。特にホールは、木の感触を生かした温もりあふれる造りに仕上がっている。また、建物の高さを低くしたことで、バックに空や山々が見渡せる。「設計者の方には、住民の声を最大限に生かしてもらったと思います」。週に5〜6回は、太鼓の練習や会議などで同施設を利用するという鳴瀬さん。「住民の皆さんにも、生活の一部のようにこの施設を利用してもらいたいですね」。

ワークショップの成果は、別の形でも表れている。ワークショップの参加メンバーや町の文化を考える人々が中心となって「ひびきの森大学」を結成。今後は、講演会や音楽会など幅広く取り組んでいくという。「この建物のおかげで住民のこうしたいという夢がかなうといい。どちらにしても、主役は地元の住民たち。住民が力を合わせて企画運営していくことで、町の活性化につながればいいですね」。

展示ギャラリーを兼ねた1階のコミュニティスペース

リハーサル室は太鼓の練習などに利用されている

木の温もりあふれる本格的ホール

住民が使い方を考える 文化施設

背景の山並みに溶け込んだデザイン

建築家
Architect Profile

八束 はじめ
YATSUKA HAJIME

1948 山形県生まれ
1972 東京大学工学部都市工学科卒業
1978 東京大学工学部都市工学科博士課程中退
磯崎新アトリエ
1984 八束はじめ建築計画設計室設立
1985 ユー・ピー・エムと改称

●主な作品

文教大学センターハウス（3号館）+8号館、文教大学体育館、白石市情報センター、泰野の医院、等々力K2ビル、東京芸夢本社ビル

建築の基本的なひな形は、私が参加した時にはほぼ出来上がっていました。また、建設までのスケジュールが詰まっていましたから設計と並行して進めました。「私たちのまちづくり事業ではワークショップ形式で建築や施設や設備の細部や具体的な運営の検討を行いました。例えば、ホールのフライタワー高さや、高低差が少なく奥行きが比較的少ない客席など、時間をかけて説明をしたり、一方利用者のみなさんはじっくり確認ができました。空調計画を担当された彦坂満州男さんに加わっていただき特殊な冷暖房設備システム（冷暖房パネルを用いた空気式床放射冷暖房）をあらかじめ紹介することもできました。単に建築の設備ということではなく、水と風と空気を大事にした環境を計画する、という意図が伝わったのではないでしょうか。また、トイレなどの細部の話が出たりする一方で、図書室やコミュニティホールなどの具体的な使い方や運営の詳細を詰めました。ホールは展示だけでなく立食や宴会にも用いたいということで、可動式の壁は収納することができます。コミュニティのリーダーの方がいろんな使い方を考えてひっぱっていってくださると思っています。

他の「私たちのまちづくり事業」と違い、熊本大学大学院の学生諸君が参加し、同じ条件で計画案をつくるというプログラムにしました。これは熊本大学の桂英昭さんが全面的に協力してくださった。3回目のワークショップの後に学生がそれぞれ自分の案を発表、住民の皆さんに加わって阿部仁史、小野田泰明さんも加わってレビューを行いました。外構のパターンなどさまざまなアイディアが出されましたね。

木造の小屋組みやホールの形状、空調のシステムなど、普通でしたら出来上がらなくては利用者には実感できないことも、ワークショップで住民の皆さんがじっくり了解することができたのではないでしょうか。

各地でワークショップが盛んですが、これが住民合意の免罪符として形骸化させてはいけないと思います。あくまでも私は建築家として自分のビジョンを明確に伝えてきました。今回のワークショップではディスカッションの中からいろんなイメージの源になるようなアイディアが出てきました。

完成

苓北町民ホール

小学生からお年寄りまでが参加したワークショップを6回開催。アイデアを出し合った結果、平成14年5月、住民の意見が随所に反映された施設が完成した。有名音楽家のコンサートをはじめ、老人会、保育園、各種サークルの活動の場として、住民交流の場としてさまざまな機能を発揮している。

実感した「町民と共生の自治体運営」の気運

町長

苓北町長 田嶋 章二さん

TAJIMA SHOJI

苓北町では今まで役場の若手職員が集まって、まちづくり計画を出したことはあったが、住民まで巻き込んだワークショップは、アートポリスの新しい試み「私たちのまちづくり事業」への参加によるものが初めてだった。しかし田嶋町長は当初からこのやり方に大いに期待していたという。「平成11年に完成した志岐小学校新校舎建設の際に、多くの住民の意見を聞かせてもらい、結果とても良いものができあがっていました。住民が建築家や役場担当者と計画の基礎から話し合いながら進めていくワークショップというやり方で、きっといいものが出来上がるという確信がありました」。完成後もイベントの企画・運営に参加するなどソフト事業への積極的な住民参加が行われている。町が進める『町民と共生の自治体運営』の実現に向けて、行政任せではなく、自分たちも一緒にやるんだという意識が住民の中から沸きあがってくるのをひしひしと感じているという。

今後、このホールが住民自らが自分達の楽しみを作り出す拠点になり、同時に新たな文化が芽生える発信地になればと田嶋町長は話す。「このホールを通じて、音楽・芸術の分野でも若い才能がどんどん引き伸ばされていけばいいですね。住民の皆さんに、一緒にいろんなことをやっていこうという気運が高まるのを期待しています」。

"雑談"のなかから生まれたアイデア

役場担当者

前 教育委員会 田平 雄二さん

TABIRA YUJI

「最初は"ワークショップ"というやり方に戸惑っていた感のある住民の皆さんが打ち解けるにつれ、"雑談"の中から、次第に色々なアイデアや意見が出るようになりました」。敷地内の庭を通学路として利用したいと言った小学生。外からでも館内で行われているイベント等が見えるように縁側を作りたいと言ったお年寄り。「ここには皆さんの意見がそこここに反映されていますね」。

ワークショップから芽生えていた"交流"

役場担当者

町民課 平野 雅章さん

HIRANO MASAAKI

「館内レイアウトのキーワードのひとつは"交流"です」。例えば、給湯コーナーと情報コーナーでの異世代間の交流や、通行中の人が縁側の外から見て、中で何が行われているのかがわかるような造りの、館内と外との交流など。「でも、ワークショップの段階から、小学生からお年寄りまで、異世代間での話し合いが活発に行われていましたから、交流を十分に実感できました」。

建物の魅力で町の観光発展を

施設関係者

苓北町民ホール事務長 平井 由一さん

HIRAI YOSHIKAZU

「ワークショップを経て建設されただけあって、住民の愛着が感じられる」と話すのは同ホールの事務長・平井由一さん。利用者の年齢層は高齢者から幼児までと幅広い。魅力的な外観、音響のよいホール、配慮の行き届いた施設ということで、「町外の方からも建物を見せてほしいという問い合わせが多くなってきました。建物の魅力をどんどん地域外へもPRして町の観光発展につなげたいですね」。

世界的音楽家のコンサートに関わる感動

利用者

志岐保育園園長 宮﨑 國忠さん

MIYAZAKI KUNITADA

地元保育園の園長宮﨑國忠さんは、町民ホール完成記念のイベント「五嶋みどりコンサート」の企画・運営に関するワークショップから関わった。「世界的に有名な音楽家のコンサートに関わることができるということに大きな喜びを感じました」。また宮﨑さんの保育園のお遊戯会も同ホールで開いた。「本格的なホールでの開催に、園児はもちろん、保護者も保育士も大きな達成感を得ることができました」。

住民の活動と結びついた機能とデザイン

木という素材がさまざまな表情を見せる外観

住民が自然と集まってくるスペース

情報コーナーではパソコン使用も自由

音響・照明など本格的機能を備えたホール

建築家 Architect Profile

阿部 仁史
ABE HITOSHI

1962 宮城県生まれ
1985 東北大学工学部建築学科卒業
1989 南カリフォルニア建築大学建築学修士課程修了
1988～ コープヒンメルブラウ勤務
1992 阿部仁史アトリエ開設
1993 東北大学工学博士課程修了、工学博士
1994～02 東北工業大学助教授
2002～ 東北大学大学院都市・建築学専攻教授

●主な作品
宮城県立総合運動公園スタジアム、読売メディア・ミヤギ・ゲストハウス、松島公園管理事務所、みちのく風土館、M歯科医院

小野田 泰明
ONODA YASUAKI

1963 石川県生まれ
1985 HPデザイン・ニューヨーク
1986 東北大学工学部建築学科卒業
1998～99 カリフォルニア大学客員研究員
現在 東北大学大学院都市・建築学専攻助教授

●主な建築計画
せんだいメディアテーク、名取市文化会館、仙台基督教育児院、仙台市茂庭台豊齢ホーム

●小野田　今回のプロジェクトに参画した当初、町の皆さんも何をつくったら良いかが明確ではありませんでした。そこで、この地域には何が必要なのかという議論から入ることが出来たのは、僕たちが建築家と建築計画者（建築のハードとソフトを繋ぐ人）のチームだったことが大きかったと思います。おかげで、町の置かれている状況や他の地方の動向などを一方で冷静に分析しながら、ホットなワークショップに突入できることができたと思いますよ。

●阿部　ワークショップに入ってからは、町のみなさんと未来の世代が生き残るために、何が必要なのかを真っ白な状態から議論に入りました。そのうち、世代や立場を超えていろんなことを話したり企てたりする「場」こそが必要だということに気付き、それを定常化するプラットフォームのようなものを形作ればいいのではないだろうかという話が、今回のプロジェクトの始まり。そして、町の方にあったアイデアを整理して、現在の機能の組み合わせに近づいていくことができました。ホールの形態が特徴的になったのは、住民の活動に必要な広さを限定された床面積に収めることや、極端に違う高さの各空間を効率的に組み合わせることなど、条件を満たしていく中で自然に創り上げられていったものなのです。

●小野田　そうそう、以前から全国どこの町に行っても都市のホールを縮小コピーした形から入ったようなデザインが多いことが気になっていました。扉を後ろにつけたり、ステージを平らにしたのは、ワークショップを通して、実際に使う人の気持ちが手にとるように理解できるようになっていたからです。学校の発表会、若い人たちのクラブ、大人のダンスパーティ、そんなのにも格好よく使えるような仕掛けにうまく機能していると思いますよ。実は、完成後もちょこちょこ運営や使い方のことでお手伝いしているのですが、町の皆さんがいろいろな使い方を考えてくれているので、こちらとしても色々と発見があって刺激になっています。

●阿部　これから少子高齢化が進む中で、今回の町民ホールのような小さな地域のコミュニケーションのプラットフォームの構築が必要不可欠なものになってくると思います。そのためには、建築を単に物質的で静的な環境としてではなく、住民の活動と結びついた動的な場としていかにデザインできるかが大切なのです。そして、こうした「生きた建築」を増やしていくことが私たちの使命だと思っています。

完成

西合志町保健福祉センター「ふれあい館」

町の福祉行政の核として、平成14年5月にオープンした西合志町保健福祉センター「ふれあい館」。高齢者・障害者福祉センターやこども支援センターなど5つの機能を持ち、お年寄りから子どもまで幅広い層の人々が利用する。さまざまな機能をトータルに備え、福祉や保健活動全般を広くカバーする複合型の施設として、全国的にも注目を浴びている。

住民が安心して暮らせる町の拠点施設に

町長

西合志町長 大住 清昭さん

OOSUMI KIYOAKI

「住民に満足してもらえること、利用してもらえる施設であることを第一に考えました。そのためには、住民の意見を十分に反映させた施設でなければなりません。そこで、住民の方に施設の在り方や役割、使い方などを十分に考えていただき、意見を出していただくための手法として、ワークショップ方式をとりいれることにしたんです」。当時を振り返り、大住清昭町長は言う。平成13年7月にオープンした温泉センターの建設では、立地や設備などについて、住民から不満の声も聞かれた。次に造る福祉センターは、住民の声を反映させた満足度の高い施設でなければ。行政側にはそんな強い思いもあった。

「政治は、高齢者はもちろん、障害者、子ども、妊婦さんなど弱い人の立場に立って考えなければならないというのが私の持論です。人間は、いつでも突然弱い立場に置かれます。だからこそ、全ての弱い立場の人に住み良い町になって『どんなことがあっても西合志町なら安心できる』と思ってもらえる町にしていきたい。そのための拠点がこの福祉センター。全ての住民が安心して暮らすまちづくりに貢献できるようこれから中身をより充実させて、住民の皆さんにとって、行けば悩みが解決する場所になればと思います」。

このセンターを拠点として地域の絆と交流をより深めたい

施設関係者

前 館長 坂口 和也さん

SAKAGUCHI KAZUYA

「住民の皆さんの意見を取り入れたことで、細かいところまで目が行き届き、より使いやすい施設になったと思います」と前館長の坂口さん。センター内では、だご汁や竹馬などを作るレクレーションを不定期で開催。お年寄りと子どもたちとの交流を図っている。「お互い良い刺激になっているようです。こういった異世代間の交流ができるのも、複合型の福祉施設ならではですね」。今後は、幅広い年代の人々に気軽に利用してもらえる施設になれば、と願う坂口さん。「この建物を“地域サロン”として充実させていきたい。このセンターを拠点に、さらに地域の絆と交流を深めていけたらいいですね」。

私たちの声が届いたことがうれしい

利用者

後藤 由起子さん

GOTO YUKIKO

社会福祉協議会の理事を務める後藤さん。ワークショップでは、光が差し込む明るい造りや平屋建てなどを希望した。「実際に利用する私たちの声が届いたことは嬉しいですね。それに、同じ館内から子どもの声が聞こえてくると、こっちまで気分が明るくなります」と微笑む。昨年は、同センターで行われたパワーアップ教室にも参加。県内で唯一というパワーリハビリ機器を使った、高齢者のための歩行訓練だ。「若さは気構え次第(笑)。またこの教室が開かれたらぜひ参加したいですね」。

子育てのヒントを与えてくれる場所に

利用者

近藤 妙子さん

KONDO TAEKO

子育てサークルを主宰する近藤さんがこのセンターに望むのは、いろんな面で子育てのヒントを与えてくれる場所。「今後は、子育ての悩みを聞いてくれる常設相談窓口を設置したり、ホームページを開設したりと、より育児サービスが充実してくれたら嬉しいです。このセンターができたことは、世代の壁を取り払った交流ができる良い機会では。センター内だけでの触れ合いにとどまらず、ここで知り合った人たちが他の場所でも交流を深めたり、世代を越えた交流ができるといいですね」。

安心して暮らせるまちづくりに貢献

5つの機能を持ったこの施設には、世代を越えて多くの人が集まる

中庭からも陽光が射し込む明るい館内

壁に大きく描かれた案内表示

建築家 Architect Profile

今村 雅樹

IMAMURA MASAKI

1953 長崎県生まれ
1977 日本大学理工学部建築学科卒業
1979 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程前期修了
1992 今村雅樹アーキテクツ設立
2000～日本大学理工学部建築学科助教授

●主な作品

Y-DETALL、ガラス屋の家、TH-奈良の家、スパイラル・ハウス、太田市総合ふれあいセンター

建物は保健福祉系センターの複合施設なので、いろいろな立場から意見をいただこうと検討委員会が組織されていました。私自身、実際に使う人たちの声をもっと聞きたいという気持ちが強かった。

施工段階では近くの小学校の子どもたちがお風呂のタイルに絵を描いてくれました。子どもたちのパワーで明るく楽しいお風呂にしようと思ったわけです。地域の人たちとのコミュニケーションのきっかけになったし、何よりも、おじいちゃんおばあちゃんが絵を見て和んでいるみたいですよ。

いろいろな機能が複合している建物なので、訪れた人たちが迷わないよう大きな文字のサインにしています。ゾーンごとに色も決めてあって案内する人が「○○色のところに行ってください」などのように説明できます。

清潔感があって明るい建物にすることが、設計の目標の一つでした。委員会の人たちと回った建物の中には、珪藻土やフローリングを用いることでヒューマンな印象を作り出そうとしたものもありました。実際にはこういった建物の使い方はかなりハードですから素材で無理をすると大変なことになります。コンクリート打ち放しの曲面壁は、ハードな使い方にも耐えられながら気持ちのいい建物にするためのデザインでもあるのです。

もう一つ、5つの機能を持つ複合施設ということで、内部の壁を緩やかに湾曲させ、建物全体の一体感をつくっています。間仕切を透明ガラスにすることによって部屋相互の連続感をつくることはできますが、建物全体の一体感は生まれません。自分がいる場所の空気がみんなつながっているような印象をつくり出したかったのです。また、壁を曲げたことで、病院のような冷たい印象の廊下とは違ったものになりました。

この種の地域施設では、これから、「声を聞く」時間と費用を確保することが大切になると思います。いろいろご意見を頂いたり、時間をかけた見学会にも参加していただいた検討委員会の方々と企画していただいた町の関係者、そして絵タイルを描いてくれた子どもたちに感謝致します。

完成間近

小国町立北里小学校屋内運動場

平成14年6月に着工した小国町立北里小学校屋内運動場。設計者に末廣香織さんを迎え、保護者代表や地域住民を交えた6回のワークショップと、在学中の子どもたちを対象にした子どもワークショップを開催した。平成15年3月完成。

質の高いワークショップの成果 まちの"拠点"として期待

町長

小国町長 宮崎 暢俊さん
MIYAZAKI NOBUTOSHI

"悠木の里づくり"をキャッチフレーズに、ツーリズム大学や学びやの里といった交流事業を展開している小国町。これまでの施設建設と交流事業を通して、ワークショップを経験している町だ。6つの大字ごとに、それぞれ地域づくりを推進する組織「コミュニティプラン推進チーム」があり、ワークショップをはじめとする活動を行っている。

「"私たちのまちづくり事業"はソフトに予算を付けてくれる事業。小国町はワークショップの必要性を認識し、基盤がしっかりしている町なので、取りかかりやすくスムーズに進みました」。宮崎町長が満足気に語る。

ワークショップで決定したのは、単なる小学校の体育館ではなく、地域住民がバレーボールをしたり利用できるスペースにする、という方向性。「例えば子どもたちの部活動が終わった後は、地域の人たちに責任を持って使用してもらおうと思っています。私は、教育とは自然、産業、歴史、文化といった地域全体で、子どもたちを育てるものと考えています。子どもたちの体育館であると同時に、地域のコミュニティスペースとして利用されることで、住民が教育と係る機会だと思います」。

また、小国町には合宿に利用されるなど外部からの利用が多い交流の拠点"木魂館"がある。その木魂館とも連携を図るという。学校教育の場が地域の生涯学習の場へ、そしてコミュニティへと広がっていく。「期待どおりになるかどうかは、今後の運営次第。楽しみにしています」。

子どもたちを地域全体で育てるための体育館

トップライトから光が降り注ぐアリーナ

小国地方の伝統工法「菱葺き」を応用した外観

体育館建設を通して深めてほしい町への愛情と誇り

施設関係者

北里小学校校長 春野 宗敏さん
HARUNO MUNETOSHI

小学校の体育館ということもあり、"子どもワークショップ"が実施された。北里小学校5･6年生の子どもたちが、グループごと模型を造り、自分たちの体育館建設へ期待を膨らませた。「体育館を建設するというワークショップに参加することで、自分たちの小学校に対する思いが強くなってくれれば」と春野校長は言う。

建設工程を見て驚くのが、鉄骨とともに、骨組みにふんだんに使われている"小国杉"。近づくと、杉が香る。

「建設途中を子どもたちに見てもらうのもいい機会。構造はこうなっているのか、あの部分はどうなっていくのか…など、いろんなことに興味を持ってもらいたい。そして小国杉が使われているのを見て、自分たちの町の資源を誇りに思ってもらいたい。現場を見ながら、小国杉の話をしたりしています」。

体育館内部は、木に囲まれた、ぬくもりのある空間になるという。これは保護者たちも希望していたそうだ。

子どもワークショップに参加した生徒たちの半分は、今春卒業を迎える。「卒業式はぜひ、みんなが"建設"に参加した体育館で挙げてあげたいですね」。

"使うのは自分たち"思いを伝えた有意義なワークショップ

住民

PTA副会長 今永 公昭さん
IMANAGA KIMIAKI

「完成後に、ああすればよかったのに、こうしたらよかったのに…と言いたくないですよね。建設段階から意見を言えるのがワークショップ。時間が許す限り積極的に参加しました」。子ども2人が北里小学校に通う今永さんはワークショップの意義をこう考える。

ワークショップではさまざまな意見が出された。「今までは、狭いうえに天井が低く、バレーボールができなかった。"広く""天井が高く"というのが最初の希望でした」。そしてワークショップを重ねるごとに「地域の集まりの場として使いたい」「外部の人たちも使えるとよいのでは」…ハード面からソフトの部分までさまざまな意見が出された。ワークショップの回数は6回を数え、模型は何度も作り直された。県外へ視察も行った。

「設計者はどちらかといえば、造ってしまったら終わりですよね。でも使っていくのは私たち。真剣に意見を出しましたよ。設計者は私たちの意見を反映しようと一生懸命考えてくれたと思います。子どもたちの体育館であると同時に、私たち住民も活用できる地域の核となる施設になるのですから」。

建築家
Architect Profile

末廣 香織
SUEHIRO KAORU

1961 大分県生まれ
1984 九州大学工学部建築学科卒業
1986 同大学大学院修士課程修了
1986~90 SKM設計計画事務所
1990~91 EAT一級建築士事務所代表
1991~94 ベルラーヘ・インスティテュート建築大学院
1993 ヘルマン・ヘルツバルハー建築設計事務所
1994~98 九州大学工学部建築学科助手
1998 NKSアーキテクツ共同主宰

●主な作品
大野城の住宅、東油山の住宅、三瀬の山荘、YKK黒部堀切寮、「佐賀県西有田町タウンセンター」プロポーザル最優秀賞

ワークショップでは、はじめ、「どこに建てるのか」が中心的な話題でした。周辺の用地の問題や、学校としての将来の計画などを議論しながら、現在の計画へ絞り込まれていったわけです。どういう風に学校を地域に開放していくのかについてなどもいろいろな意見が交わされました。設計が決まりはじめてからは、子どもたちに新しい体育館について考えてもらうためのワークショップなども行いました。

小国町の林業は有名で、今回も木材を活用した建物にという要望がありました。小国町にある他の有名な建物のように、力強い木造の構造体を表現することも考えましたが、法的な制約があって、構造体をそのままきれいに見せることは簡単ではありませんでした。コストの問題もありますしね。そこで木でつくった構造体を見せることにはこだわらず、ソフトな印象の木質空間をつくろうと考えたわけです。それで、インテリアを細い木のルーバーで仕上げたわけです。この体育館は、アリーナを二つの表皮で覆うようにしてできているんです。一つ目の表皮はこの木ルーバー。もう一つは外壁です。外側の表皮は周辺環境を映し込むスクリーンだと考えています。外壁はステンレスで覆われていて、この面に空の色などが映り込んで周りの風景にとけ込むようなことをねらっています。それにこの周辺には板金でできた建物が多いんですよ。

また、体育館には直射日光を入れることができませんから、どうしても閉鎖的な建物になりがちです。この体育館ではそういう風にはしたくなかった。外の様子がうかがえるような雰囲気をつくりたかったんです。そこでトップライトをつくりました。太陽の動きや季節感などを感じることができる体育館なんです。屋根の木造トラスの間の空間を活用しようという意図もありました。屋根の部分をいくつかに分割してみせることで、建物のボリューム感を軽減するためのデザインでもあります。また、地域の人たちが寄り合いなどに使う小さな部屋など、建物の周りの小さなボリュームにも同じような効果が出ていますね。

今振り返ってみると、建築家にどういうことができるのかを考えながら手探りで進めてきました。他の人たちも同様だと思うので、みんなとの情報交換をしたいですね。

計画中

南関町物産館・インフォメーションセンター（仮称）及び 関川河川環境整備

南関町で立ち上がった、河川環境整備公園計画。その公園の一角に、南関町の文化を発信する施設が建てられる。この施設を商店街の活性化に生かすため、どんな役割を持つどんな施設にしたいのか。平成13年度に5回のワークショップが開催され、商店街、一般住民、行政が一体となり、具体化に向けた動きが始まっている。

住民参加で作る施設を核に中心市街地活性化を進めたい

町長

南関町長　上田 数吉さん
UEDA KAZUYOSHI

江戸時代には関所があり宿場町として栄えた南関町。その後も、多くの商店が並ぶ地域の中心街として、通りには多くの商店が並んでいた。しかし現在は、全国の商店街衰退化の事例にもれず、シャッターをおろす店舗が増え、通りは閑散としている。

町に昔のにぎわいを取り戻そうと、町では平成11年度から中心市街地活性化に取り組んできた。

そんなとき、商店街に近い関川の河川環境整備公園計画が持ち上がった。「活性化のために、住民の交流の場、住民と観光客との交流の場が必要だとする中心市街地活性化基本計画が事前にありました。そこで関川周辺を河川公園にして交流の場にしようと考えたんです。住民の方に使いやすく、訪れる人には南関町のイメージも伝わるようなものにしようと、ワークショップ形式の『私たちのまちづくり事業』に参加することにしました」。上田数吉町長は言う。

町の特徴は何か、何を伝え残していきたいのか…。住民がみんなで話し合うことで、町の持つイメージなどが明確になっていった。現在は、若者や女性を中心に活性化の気運が高まり、イベントや空き店舗対策事業などの活動を行っている。「町の歴史や文化を生かしたこの施設は、町のアイデンティティを発信する場になると思います。あとは、この施設が生かされるような施策を行い活性化につなげていくために、行政と住民が連携していきたいと考えています」。

じっくり話すことでより愛される施設づくりを

役場担当者

前 商工観光課長
大瀬 知則さん
OOSE CHINORI

「ワークショップの中で出た南関町が持つイメージや、ぜひ欲しいと住民が考える機能を取り入れたモデルができたと思っています」と語るのは、「私たちのまちづくり事業」を担当した大瀬さん。住民が積極的に参加することで、愛着や期待も高まったという。「現在は住民の皆さんに施設の運営方法など細かいところを考えてもらっています。活性化の動きも具体的になりました。じっくり話し合いながら進めていくことで、より愛され、大切にされる施設づくり、まちづくりが可能になっていきます。この事業ならではの効果ですね」。

たくさんの人が商店街に関心を持つきっかけになった

住民

せきまち響動隊
北原 浩一郎さん
KITAHARA KOICHIRO

「何より驚いたのは、ワークショップに訪れた一般の人たちの数。『あ、みんなも商店街に興味を持ってくれてるんだ』と思いました」。商店街活性化に関する取り組みを積極的に行う「せきまち響動隊」のメンバーで、現在は施設内に物産館やレストランなどの設備をどう配置するかなどについて話し合っている中心メンバーの1人、北原浩一郎さんは語る。「みんなのやる気が形になった施設だから、もうこれしかないと思っています。ぜひ、活性化のための核となる施設にしてきたいです。そのために、どう活かしたら町がにぎわうかを、今後はもっとつめていきたいですね」。

商店街と1つになって町の発展の助けとなるような施設にしたい

住民

南関町商工会　経営指導員
牧野 定徳さん
MAKINO SADANORI

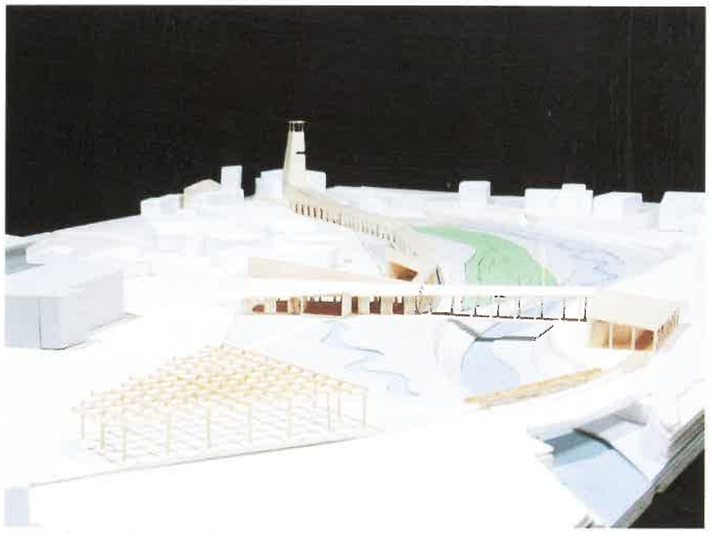
「南関町商店街の特徴は『自分たちが生き残れる町にしていきたい』と考えている人が多いということです。だからまちづくりへの興味も強いのだと思います」と、商工会の牧野定徳さん。セキアヒルズからインターチェンジへのバイパスができつつあり、完成すれば中心市街地には車が通らなくなってしまう。「そうなれば商店街はますます廃れる。通り抜けに歯止めをかけるための施設として期待しています。そのためには、今のモデルだけでは不十分。活用する商店街や町の人たちが十分に話し合って、施設をどんどん具体的にしていかなければならないと思っています」。

商店街再生の夢をかたちに

ワークショップには、毎回40人以上が集まった

関川の周辺環境を整備し、交流の場に

ワークショップの後、商店街の空き店舗を利用してギャラリーを開くなど、積極的な動きが始まっている



河川環境整備公園の模型。住民と建築家の考えが形になっていく

建築家
Architect Profile

奥山 信一
OKUYAMA SHINICHI

1961　東京都生まれ
1986　東京工業大学工学部建築学科卒業
1989　若松均とDESK5設計を共同設立
1992　東京工業大学院博士課程修了
1994　工学博士
1999　東京工業大学工学部建築学科助教授

●主な作品
「南飛騨国際健康保養地　健康学習センター（仮称）」最優秀案受賞、「群馬県中里村新庁舎」設計プロポーザル入選

今回のプロジェクトは、大きく二つの方針で進めました。一つは、徹底的に話を聞き出すことです。ここには、建物を利用する人、このまちに住んでいる人、町を訪れる人の三種類の人たちが来るのですが、そういうたくさんの人たちから話を聞き出し、情報を集めました。そして、集められた話を分類して、みんなで議論をしました。二つ目は、町の魅力を徹底的に観察することです。この町には、町の人たちが見逃してしまっているような魅力がたくさんあります。そういったものを集めて、魅力マップをつくったんです。

それを元に具体的な計画に発展させていったわけです。まず、最低限の建物だけをプロットした配置図のようなものをつくって、それを元に、町の人たちみんなでアイデアを出し合いました。どこを入り口にするのかといったような平面配置的なことは、町の人にも考えやすいみたいですね。町の人たちの意見は大きく二つに分けることができました。一つは、町の活性化を目指すものです。経済的、観光的な活性化のためには、たくさんの人がこの町に集まることが一番の目標ですよね。もう一つは、住み良い町にしたいというものです。華やかでなくとも自分たちが楽しく暮らせる町にしたいというわけです。将来の子供たちのためにも良い町にしたいという意見もありました。

敷地の隣にある「うから館」という温泉施設には外からもたくさんの人が集まります。気持ちの良い公園をつくれば、この温泉に集まった人たちが町に出かけていくきっかけになります。気持ちのいい公園ができることで住み良い町になり、その結果として町が活性化するのです。公園の中には、出初め式の会場を用意したり、大蛇祭りで用いる大蛇の製作所やシンボルになる火の見櫓を建てたりすることにしています。また南関町は南関あげや南関そうめんなどが有名ですが、それらを食べることのできる料理屋も計画しています。これらはみんな、僕たちと町の人たちとの話し合いの中で出てきたアイデアです。

南関町の計画は「私たちのまちづくり事業」に適したものだったと思います。土地をどうするのかなども、まだこれからの話ですが、役場の人たちも事業をやっている人たちも、町の人たちはみんなやる気いっぱいなので、楽しみですね。

計画中

一の宮ふれあい公園（仮称）

「私たちのまちづくり事業」として取り組んでいる「一の宮ふれあい公園事業」（仮称）。建築家の岡部憲明さんを迎えワークショップを重ね、平成14年に加工施設を建設。平成15年度には物産直売所を建設予定。

一の宮町を代表する新しいシンボルになって欲しい

町長

一の宮町長 渡邉 力丸さん
WATANABE RIKIMARU

35年間町職員として、一の宮町を見てきた渡邉町長。「一職員として、ずっと住民参加型のまちづくりを考えていました。町長就任して、アートポリス事業の話を聞いたとき『これだ!』と思ったんです」。ワークショップで事業のコンセプトを構築し、住民が施設への意見をぶつけあう。住民とノウハウをもった専門家と行政が一体になり、建物を造り上げるアートポリス事業に価値を見出した。

平成14年度、ふれあい公園の一角に農林水産物処理加工施設が完成。ワークショップで、建物の利用方法の提案など幅広い意見を聞くことができ、住民の施設に対する責任感を持ってもらうことができた。

「歴史ある阿蘇神社へ参拝に訪れる人たちに、できるだけ長く一の宮町にとどまり、町のことを知って欲しい。何度も訪れたくなるものを造りたい」と願う渡邉町長。たくさんの人が集まり、子どもが安全で自由に遊べる公園を目標に、平成15年度には物産直売所を建設予定。その後、周辺整備を進めていく。

一の宮町には今、文化活動を披露できるような大型施設がない。「今後も住民の意見を取り入れながら施設整備を図り、芸能文化活動や町民の健康づくり情報などを発信する場所にしたい。また、一の宮町を代表するシンボルとなって欲しい。設計者の経験と知識、住民の思いを合わせて、地元の人も、観光客も楽しめる新しい“町の顔”を創っていきたいと思っています」。

「ときめき」に出会える公園を

住民

新住民・一の宮を楽しむ会 松本 哲さん
MATSUMOTO AKIRA

タウンウォッチングが趣味の松本さん。町にも歴史的遺産がたくさんあることなど、新たな発見に出会ったという。「今回のワークショップは、一の宮町のいいところと悪いところを見つめ直すいい機会。住民が集まり、情報発信ができる施設、行政ではなく、住民主体で管理運営できる施設となって欲しい」と真剣な表情で語る。「住民全員の意見から『発見』した一の宮町の良さをふくらませて、『やすらぎ』と『ふれあい』のある、そして、感動、楽しさ、わくわくといった『ときめき』に出会える公園になることを楽しみにしています」。

自分の意見が反映されるのが楽しみ

住民

みやび+1代表 森下 幸美さん
MORISHITA YUKIMI

「きれいなトイレがあった方が印象もいいし、出かけようという気持ちになる。新鮮な食材は物産館で買い物をする人が多い」と、“活動”と“主婦”、2つの視点から今回の事業をとらえる森下さん。施設が本当に一の宮住民にとって必要なのかと、根本的な点から考える。「ワークショップに参加して、住民の意見が施設に反映されるのは、とても夢があること。阿蘇の自然を壊すことのないデザインで、住民が使いやすいことが一番大事。また、多目的に利用でき、住民のコミュニケーションの場となる施設にしたいですね」。

こだわりの農産物を届ける施設を

施設関係者

農産加工所代表 吉田 清二さん
YOSHIDA SEIJI

平成14年度に農林水産物処理加工施設が完成し、そのすぐ隣に直売所ができる。生産者の立場から「大変ありがたいことです。地元で採れた作物の加工品を地元で売ることができれば、生産者の大きな励みになります」と話す吉田さん。一の宮町はトマトをメインに加工品を生産しているが、「これからは新商品開発にも力を入れていきたいですね」。ここから一の宮町を代表する新たな特産品が生み出される日も近い。「特産品を生かせるような加工体験施設、交流施設ができれば、町の活性化の拠点になれますよね」。

住民の活動が公園のデザインを決める

自分の活動を語って、住民同士の意見交換も行われる

スライドを使って、ヨーロッパなどの事例を紹介

活動の舞台となる公園に思いをめぐらせる

建築家 Architect Profile

岡部 憲明
OKABE NORIAKI

1947 静岡県生まれ
1974 ポンピドゥー・センター、IRCAM設計・建設に従事
1981~89 RPBWパリのチーフアーキテクト
1988 関空ターミナル国際コンペ優勝、RPBWJ設立、代表
1994 岡部憲明アーキテクチャーネットワーク設立、主宰
1996 神戸芸術工科大学教授

●主な作品
関西国際空港旅客ターミナルビル、牛深ハイヤ大橋

一の宮町農林水産物処理加工施設、そして直売所、公園と計画が進んでいっています。300m²ほどの加工施設は3月末に完成します。その工事と平行して現在「私たちのまちづくり事業」を進めています。

1月半ばに3回目のワークショップを終えたところです。参加しているのは、地域にお住まいのいろんな方々。自然や環境、水の研究や保護や実践を行うグループ、阿蘇神社の伝統や歴史を研究する方々、老人福祉やコミュニケーションに関わる方々、建設中の加工施設で働かれる方々、農業や自然食品の生産者の方々、生涯学習や文化活動に関わる方々などです。

そもそも私たちの事務所が関わったときの条件は公園をつくろう、ということでしたから1回目は「自然の真ん中に公園をつくるためには」をテーマとし、私がヨーロッパの都市公園の事例をスライドを交えて紹介、レクチャーしました。都市の中に自然を取り込もう、再現しようとするのがヨーロッパの「公園」ですが、日本ではこのような歴史は浅いですから。それでは、「今回の敷地では?」と問いかけたわけです。参考になるような公園のプログラムを皆さんにお見せしました。2回目は「どんなものが欲しいか?」というテーマで自由連想式にアイデアを出し合いました。ヒアリングを軸にしています。3回目は2回目のヒアリングの要素を反映した公園のダイアグラムをワークショップのたたき台として提示し3つのグループにわかれて積極的に意見を出してもらいました。市役所、県立高校に近いこと、敷地の利便性への評価、水を利用する公園などの提案に加え、文化活動を行うような適当な規模のホールがないことなどの意見がだされました。4回目は少し具体的な公園と施設のモデルを提示し、さらに皆さんの考えを発展してもらうつもりです。

これから、公園とその中に置かれる諸施設（生産・消費・文化など）を一体化して考え、阿蘇の景観、風土に新たな意味をもたらす方向を参加している皆さんと考えていきたいと思っています。幸いこのプロジェクトは先行して加工施設が竣工しますから、これが皆さんのイメージを具体化する助けになります。私たち建築家と使う側ユーザーの共通言語とできるわけです。自然景観を高めるような建築をつくって日常生活を高めていきたいと考えています。自分たちの家の中庭のような、住民にとっても、またここを訪れる観光客にとってもやすらぎを感じられる居間のような公園をつくり上げていけたら、と考えています。

南小国町営 矢津田団地・杉田団地

現在、2期工事が進行中。奥にはこれから建替えられる既存の町営住宅

MINAMIOGUNI

ワークショップで分かる使い手のニーズ

建築家 ● PROFILE
片山 和俊
KATAYAMA KAZUTOSHI

1941 東京都生まれ
1966 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1968 同大学大学院修士課程修了
環境設計－茂木研究室勤務
1973 東京芸術大学美術学部建築科助手
1981 DIK設計室開設
1989 東京芸術大学助教授

●主な作品
草原の家、金山町営住宅羽場団地、彩の国ふれあいの森-森林科学館・宿泊棟、コーハウス喜多見

プロジェクトは、「私たちのまちづくり事業」の一つ。おかげで入居者の皆さんと入念な打ち合わせをすることができました。たとえば駐車場の位置のことだとか、ちょっとした使い勝手、平面計画についてとか。

成果として一番大きかったことは外構だと思います。外構予算はあまりなかったのですが、そのかわりに庭で作物を作れるようにしました。これはワークショップの成果です。杉田団地では各住戸ごとに、均等に菜園にできるような庭を用意しています。ただ見るだけではなく、楽しく使われる庭になることでしょう。

住民の皆さんだけでなく、町長さんをはじめ町の担当課のみなさんともずいぶん議論を重ねました。詳細な設計を進めていく段階になってから解決しなければならない課題もありますが、町の方々は町営住宅を長く管理されてきているので「予算」とともに「メンテナンス」についてかなり慎重な意見をお持ちです。いろんな具体的な検討を行いました。このプロジェクトは複数の期に分かれて進行していますから、二期以降の段階では前期の経験や成果をフィードバックして設計に取り込むことができました。今、思うのは発注者である役場の方々と、もっと早く打ち解ける方法やきっかけが必要かな、ということ。基本構想の段階では、発注者の皆さんと一緒に関連施設や事例を見学して率直な意見を述べあうような、つまり「ワークショップ」をやることが必要だと思います。

砥用町 林業総合センター

丸太と角材で覆われた内部空間

TOMOCHI

地元産杉材の新たな活用方法

建築家 ● PROFILE
西沢 大良
NISHIZAWA TAIRA

1964 東京都生まれ
1987 東京工業大学工学部建築学科卒業
1987~93 入江経一建築設計事務所
1993~ 西沢大良建築設計事務所 設立
現在 筑波大学非常勤講師、東京理科大学非常勤講師、日本大学非常勤講師

●主な作品
立川のハウス、ショップ・エンデノイ、Sビル、Cビル

砥用町では現在、宅地と運動公園の開発をしていますが、プロジェクトは、そこに建つ林業センター、林業従事者のための研修施設です。建物は500m²あまりの木造の建物。砥用町には杉材が大量に生産されています。ある程度の規模の木造施設になると、洋材ばかり用いられていて、杉材を使ってない。この建物は杉材の活用実験プロジェクトのような側面もありますので、従来にない杉材の活用法を考えています。

構造システムのイメージは、木材で大きなブッシュ（茂み）を造るような感じです。丸太と角材が、床からブッシュのように生えている。それが上のほうにのびて枝のように絡み合って、全体をすっぽりと覆っている。そういう構造体がガラスのショーケースに入っているような感じです。流木が集まっているような、大きなマリモのような、ちょっと変わった木造建築です。最初、杉らしさをみせるために丸太だけで架構しようとしたのですが、丸太が太くなりすぎて、ちょっと異様な印象になるので丸太と角材を混ぜて用いる計画にしました。

建築予定地は造成地ですので、杭が必要です。全体を軽くするために、基礎も杭も鉄骨製。つまり鋼管杭と鋼鉄基礎で下部構造を造る。上部構造は木造でコンクリートを一切用いない。このことは、資材リサイクルの観点から合理性があるし、建材としての木材の重要度が増します。その意味でも、おもしろい提案ができるのではないかと考えています。

一の宮町農林水産物処理加工施設

ハイサイドライトから光が射し込む作業室

ICHINOMIYA

構造と断熱と意匠が一体化した木材

建築家 ● PROFILE

岡部 憲明
OKABE NORIAKI

1947 静岡県生まれ
1974 ポンピドゥー・センター、IRCAM設計・建設に従事
1981～89 RPBWパリのチーフアーキテクト
1988 関空ターミナル国際コンペ優勝、RPBWJ設立、代表
1994 岡部憲明アーキテクチャーネットワーク設立、主宰
1996 神戸芸術工科大学教授

●主な作品
関西国際空港旅客ターミナルビル、牛深ハイヤ大橋

加工施設は、町の特産品、トマトでケチャップをつくる施設です。現場が骨組み状態だと、特徴的な桁の構造を見ることができます。杉の75mm角柱を束ねて鉄骨の梁の上に載せ、水平力を持たせています。さらに、この束ねた角材は断熱材としての役割も果たしていますので、通常に用いる断熱材の厚さは20mmしかありません。そして建物の内部からは、この角材を意匠材として見ることができます。阿蘇という大自然の風景の中では、景観を阻害するような背の高い建物は不要だと考えました。屋根の水平のラインを強調してひっそりと建っているような、でも新たな風景をつくりだす、そんなデザインが必要だと思っています。屋根というより、本当に薄い庇のように見えるのですが。

この構造は播繁さんとデザインしています。やはり熊本産の杉を建物に使いたい、ただ従来からある木造の、いわゆるウッディな雰囲気ということではなく、木材の新しい使い方、表現を考える内にこのようなシステムが出来てきました。また、加工施設ということで、いろいろな機械や設備のレイアウトが自由にとれるように無柱の、なるべく大きな空間を確保することも、この構造を求めた理由の一つ。天窓やハイサイドライトなどによる採光の確保もデザインのポイントです。

清和郷土料理館

清和文楽館（写真右）、清和物産館（写真中央）が並ぶ敷地

SEIWA

清和文楽邑に新たな魅力が

建築家 ● PROFILE

石井 和紘
ISHII KAZUHIRO

1944 東京都生まれ
1967 東京大学工学部建築学科卒業
1975 東京大学大学院博士課程修了
イエール大学建築学部修士課程修了
1978 石井和紘建築研究所設立
現在 大阪大学、早稲田大学、東京大学講師

●主な作品
直島町役場、数寄屋邑、清和文楽館、北九州市立国際村交流センター、清和物産館、宮城県慶長使節船センター、CO2（常陸太田市総合福祉会館）

清和村では「清和文楽館」、「清和物産館」といった施設を造り、現在は財団法人文楽の里協会がそこを運営、管理しています。ところが、ここにこられるお客さんが多く、現在の物産館のレストランではさばききれなくなったのです。またレストランの料理メニューに対しても、もう少し充実した、高級なものを求めるようなお客さんが見えるようになりました。そこで、郷土料理館の建設が計画されたわけです。今度の料理館では3,000円くらいの懐石料理を用意する、ということです。文楽を見て、その後ゆっくりと食事を楽しんで、というように長い時間滞在するという需要が出てきた、ということでしょうか。

建築面積は400m^{2}程度の施設ですが100席程度の客室と、15席の個室をふたつ用意します。着工は6月くらいになると思います。竣工は来年3月の予定です。

構想としては、パンタグラフ式に丸太を組んで屋根を支えるようにしようと考えています。文楽館、物産館では角材として木を刻んだんですが、今度は丸太を使う。また、皆さんを驚かせるような建築にするつもりです。楽しみにしていてほしい。そして出来上がったら是非ここで食事をしてほしいですね。

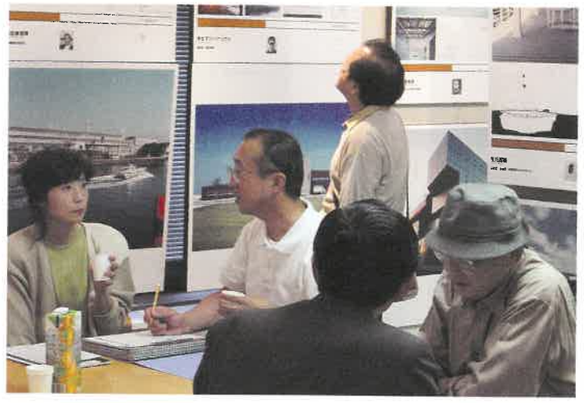
韓国の安養市長がくまもとアートポリスに注目

韓国京畿道安養市の愼重大市長をはじめ計7名がくまもとアートポリスを視察に訪れた。平成14年4月28・29日の2日間をかけて、熊本市営新地団地、県立美術館分館、熊本北警察署、水前寺江津湖公園管理棟、花畑パークトイレ、鮎の瀬大橋など10ヶ所を訪問。

特に熊本市営新地団地の、緑があふれる広場など周辺の環境まで配慮されたデザインに視察者からは「くまもとアートポリスのシステムを安養市の計画に取り入れ、素晴らしいまちづくりを目指したい」という声があがった。

そのほか平成14年度はオーストリア、アメリカ、アジア各国などから150名を越える人たちが来熊し、くまもとアートポリスを視察した。

東京の銀座熊本館でパネル展とシンポジウム



平成14年9月10～15日、東京・銀座熊本館でくまもとアートポリス事業や作品についてパネル展とシンポジウムを行った。会場には竣工作品のパネルを展示してスタッフが丁寧に説明し、アートポリス作品のペーパークラフトを配るなど、来場者を楽しませた。来場者からは「くまもとアートポリスの建物には親しみを感じる。このような素晴らしい建物があるのならば、熊本に行ってみたい」という感想も寄せられた。最終日には、建築家・岡部憲明氏、奥山信一氏、曽我部昌史氏をパネリストに迎えシンポジウムを開催した。

学生たちと建築家の新しい交流

建築家を講師に招き、熊本県内で建築を学ぶ学生グループ「Bear-Project」と建築家の交流を図るトークイベントが行われている。参加人数を30名程度と少数制にして、建築家と近い距離でコミュニケーションをとることができるのが特徴だ。1月23日には、建築家・岡部憲明氏を迎え、ヨーロッパで従事したプロジェクトを中心に、「建築家と旅～そして建築という旅～」というテーマで開催。話題は、国際的なプロジェクトチームの変遷に関することから新素材の利用まで多岐にわたり、学生たちの「建築を学ぶ・知る」意欲を高める良い刺激になった。

平成15年1月28～30日には、建築家の鈴木明氏・曽我部昌史氏に学生数名が同行し、一の宮町、小国町、西合志町、南関町、苓北町のアートポリスの近作見学及び現在施工中の現場見学ツアーを開催した。

鈴木氏・曽我部氏の解説を参考に、表層のデザインエレメントの裏にある設計者の意図や周辺のコンテクストについて丁寧に考察しながらの見学。屋根を薄くするために、分厚い梁の代わりに長い角材をパネル化して並べるとか、壁面に横1m高さ4mの巨大なサインを計画するなど、施工現場や作品、そして建築家のコメントは、講義では学ぶことのできない貴重なものだった。

一の宮町農林水産物処理加工施設

西合志町保健福祉センター「ふれあい館」